

呉服

世阿弥作

前

ワキ 官人

ワキヅレ 隨行者

シテ 里女

ツレ 同

後

ワキ 前に同じ

ワキヅレ 前に同じ

シテ 呉織

「道の道たる時とてや。く。国々ゆたかなるらん。

「そもそも是は当今に仕へ奉る臣下なり。我此間は

攝州住吉に参詣申して候。又是より浦づたひし。

西の宮にまるらばやと存じ候。

道行

「住の江や。のどけき浪の朝香湯。く。玉藻刈る

なる海士人の。道もすぐなる難波がた。ゆくへの

浦も名を得たる。呉服の里に着きにけり。く。

シテ、ツレ一声

「くれはとり。綾の衣の浦里に。年経て住むや海士

乙女。

ツレ

「立ちよる浪も白糸の。

二入

「機織り添ふる音しげし。

シテサシ

「是は津の国呉服の里に。住みて久しき二人の者。

二入

「我此國にありながら。身は唐の名にしあふ。女工

の昔をおもひいづる。月の入るさや西の海。波路

はるかに來し方の。身は唐人の年を経て。こゝに

呉服の里までも。身に知られたる名所かな。

下歌 「是もかしこき御代のため。送り迎へし機物の。

上歌 「大和にも。織る唐きぬの営みを。く。今しきし

まの道かけて。言の葉草の花までも。あらはしぎ
ぬの色そへて。心をくだく紫の。袖も妙なるかぎ
しかな。く。

ワキ詞

「さても我此松原に来て見れば。やごとなき女性二人あり。一人は機を織り。今一人は糸を取り引き。
たがひに常の里人とは見え給はず。そもそも方々はい
かなる人ぞ。

二人 「はづかしや里ばなれなる松陰の。うしほも曇る夕
月の。影にまぎれて浦波の。声にたぐへて機物の。
音きこえじと思ひしに。知られけるかや恥かしや。

ワキ 「何をか包み給ふらん。其身は常の里人ならで。此
松陰に隠れ居て。機織り給ふは不審なり。いかさま
名のり給ふべし。

シテ詞 「これは応神天皇の御宇に。めでたき御衣を織りそ

めし。 くればとりあやはとりと申し、二人の者。

今又めでたき御代なれば。現にあらはれ來りたり。

ワキ「不思議の事を聞くものかな。それは昔の君が代に。

唐国よりも渡されし。綾織一人の人なるが。今現

在にあらはれ給ふは。何といひたる事やらん。

シテ

「はやくも心得給ふものかな。まづ此里を呉服の里と名づけそめしも何故ぞ。我此所にありし故なり。

ツレ「又あやはとりとは機物の。糸を取り引く工ゆゑ綾

の紋をもなす故に。あやはとりとは申すなり。

シテ

「くればとりとは機物の。糸引く木をばくればと云へば。呉服取る手によそへつゝ。くればとりとは申すなり。

ツレ「されば二人の名によせて。

シテ「くればとり。

ツレ「あやはとは申し伝へたり。

二人「然ればわれらは唐人なれば。やまと詞は知らねど

も。

シテ「くれはとりあやに恋しくありしかば。二村山とよ
みし歌も。ふたりを思ふ心なり。

地「くれはとり。怪しめ給ふ旅人の。く。御目の程
はさすがげに。名にしおふ都人の。所から唐人と。
われらを御覧ぜらるゝは。実にかしこしや善き君
に。仕ふる人がありがたや。く。

地クリ

「それ綾と云つぱ。もろこし呉郡の地より織りそめ

て。女工の長き嘗みなり。

シテ「しかるに神功皇后。三韓をしたがへ給ひしより。

地「和國異朝の道ひろく。人の国まで靡く世の。我日
の本はのどかなる。御代の光りはあまねくて。国
富み民ゆたかなり。

シテ「東南雲をさまりて。

地「西北に風静かなり。

クセ「応神天皇の御宇かとよ。吳国の勅使此国に。はじ

めて來り給ひしに。綾女糸女の女婦を添へ。万里の滄波を凌ぎ来て。西日影のこりなく。呉服の里に休らひ。連日に立つる機物の。錦を折々の。綾の御衣を奉る。勅使奏覽ありしかば。叡感殊に甚し。それより名づけつゝ。袞龍の御衣の紋。いとなみも名たかき。山鳩色を移しつゝ。けしきだつなり雲鳥の。羽ぶさをたゞむ綾となす。いともかしこかりけり。

シテ
「しかれば万代に。絶えせぬ御調なるべしと。

地
「御定めありしより。呉服の文字をやはらげて。くればとりあやはとりと。名づけさせ給へば。年を迎へて色をなす。綾の錦の唐衣。かへすべくも君が袖。古きためしを引く糸の。斯かる御代ぞめでたき。

「これにつけても此君の。く。めでたきためし有明の。夜すがら機を織り給へ。

シテ、ツレ
「いざくさらば機物の。錦を織りて我君の。御調
に備へ申さん。

地 「げにや御調の数々に。錦の色は。

二人 「小車の。

地 「丑三つの時過ぎ。暁の空を待ち給へ。姿をかへて
来らん。さらばといひてくれはとり。あやはとり
は帰れども。鶏はまだ鳴かずや。夜長なりと待ち
給へ。夜ながくとても待ち給へ。(中入)

ワキ歌
「うれしきかなやいざくらば。く。此松陰に旅居
して。風も嘯く寅の時。神の告をも待ちて見ん。
く。

後ジテ
「君が代は天の羽衣まれにきて。撫づとも尽きぬ巖
ならなん。千代に八千代を松の葉の。散り失せず
して色は猶。正木のかづら長き代の。ためしに引
くや綾の紋。曇らざりける時とかや。

地 「此君の。かしこき世ぞと夕浪に。声立て添ふる機

の音。

シテ「錦を織る機物の内に。相思の字をあらはし。衣う
つ砧の上に怨別の声。松の風。又は磯うつ浪の音。

地「しきりにひまなき機物の。

シテ「取るや呉服の手繰の糸。

地「我取るはあやは。

シテ「踏木の足音。

地「きりはたりちやう。

シテ「きりはたりちやうちやうと。

地「悪魔も恐るゝ声なれや。げに織姫のかざしの袖。(舞)

地「思ひ出でたり七夕の。く。たまく逢へる旅人
の。夢の精靈妙幢菩薩も。影向なりたる夜もす
がら。夜もすがら。宝の綾を織り立て織り立て。
我君に捧物。御代のためしの二人の織姫。呉服あ
やはのとりぐに。くればあやはのとりぐの御
調物。そなふる御代こそめでたけれ。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション
『譜曲評釈 第五輯』 大和田建樹 著